二〇二四年　秋

尾世川正明

ある日

まがったもので撫でる
とがったもので刺す
おのれの頭蓋骨のなかに暗い間隙を受け入れて
もうあと十万回
心臓の拍動をかぞえる

岩場

その岩陰では
お産をしない習わしだった
そこは地磁気がすこし強すぎて
頭が狂ってしまうし
時に蛇が卵を産んでいるので
お産には向いていないのだ

丘陵地

広い丘陵地にはいくつかの詩が重なり合い
大地にトランポリンのような弾みと
輝きを与えている
青空からひかりとなってゆっくりと降ってくる
したたり落ちる乳と蜜

樹

樹にも感情があるのだろうか
雨を浴びて気持ちがいいとか
激しい強い夏の陽射しは
葉のおもてに張ったかたい嫌悪の緑で

はじき返してしまいたいとか
風が渡る明るい朝には
樹液をしみ出して
かわいい虫たちに吸わせてやろうとか

二月

二月が始まり立春もすぎて
雨水と呼ばれる季節のことである

それは紐を解いたひな人形の古い埃の匂いではない
開きかけた紅梅の甘い香りでもない

遠い距離を風に乗って漂ってきたちいさな粒子が
鼻粘膜につくと成長して手足を伸ばし
美しい姫になった

旅

山間の谷で
老人が死んだとき
子供の周りにいたのは
一緒に育った
山羊と雌鶏と猟犬だけだった
老人を土に埋めてから幾日か
子供は山羊と雌鶏と猟犬をつれて
遠い星の赤い沙漠へと
旅立った

言葉

言葉で作り出した目に見えないもののために
愛された人々の命を奪うものたちよ

地獄に落ちよ

言葉は愛された人々を飾る軽やかな衣裳となれ
愛された人々が踊る愉快な音楽となれ